

魏志倭人伝の丹と真珠

——倭に対する宗教民俗的認識——

門 田 誠 一

序 言

魏志倭人伝と略称される『三国志』魏書東夷伝倭人条は三世紀頃の倭と倭人の記述であり、かつ同時代の編纂であることから、その内容から当時の倭の政治・社会・外交の状況や風俗・習慣など復原的に考察することが研究史における主要な方法であった。しかしながら、実際の伝聞に基づいたとされる部分があるにしろ、陳寿による東夷伝を含む『三国志』の記述と編纂は、当然ながら、彼の生きた時代の中国の価値観と認識に依拠しており、このような観点からの考察が必要であり、それはとりも直さず魏志倭人伝の内容を相対化し、また客観視することにつながる。このような目的のためには魏志倭人伝のなかでも、とりわけ信憑性の高いとされる部分を対象にするのが、もつとも有効である。その対象としては後にふれるように魏の皇帝から卑弥呼に与えられた詔書の内容があげられ、筆者はそこに表された下賜品について、可能な限り同時期の史書・文献と考古資料を用いて、同時代的な価値観や国際交渉における贈答品としての認識に対する復原的な検討を行っている。その一環として、本論では魏から卑弥呼に与えられた物品のなかでも丹・鉛丹・真珠についての考察を行う。

それに際し、まず、丹・鉛丹に関するこれまでの所説を整理し、現状までの研究の過程を把握する。その後、中

国史書・文献にみえる丹・鉛丹などの用例とその変遷をみた後、関連する考古資料を示す。最後にこれらの双方を対照検討し、丹・鉛丹などを同時代的かつ総括的に検討し、魏志倭人伝編時点における倭に対する宗教・信仰的な認識を考察する。

一 魏志倭人伝の朱丹・丹・鉛丹に関する従前の言及

魏志倭人伝の朱丹・丹および鉛丹に関する研究史を整理する前提として、それらが記された文章と内容を提示しておく。まず、朱丹については「倭の地は温暖にして、冬・夏生菜を食す。皆徒跣なり。屋室有り。父母兄弟の臥息処を異にす。朱丹を以てその身体に塗る、中国の粉を用うるごとし。」とあり倭人が朱丹を身体に塗り、それは中国において粉を用いるのと同じであると記されている。¹⁾ここにみえる粉については後に詳述するが、中国で用いられていた化粧用の白粉のことを指すとみてよい。これとは別に倭に関する地誌的な記述には「出真珠青玉其山有丹」すなわち「真珠・青玉を出だす。其の山には丹有り」と記されている。

また、魏に遣使を行った卑弥呼に対する詔書の中に「又特賜汝紺地句文錦三匹細班華罽五張白絹五十匹金八両五尺刀三口銅鏡百枚真珠鉛丹各五十斤。皆装封付難升米牛利」とあり、すなわち「又特に汝に」「賜」う物のなかに「真珠・鉛丹各々五十斤」があり、「皆装封して難升米・牛利に付す」として魏から卑弥呼に下賜された品々のなかに真珠・鉛丹各々五十斤があげられている。

その後、「其四年倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪狗等八人上獻生口倭錦絳青縑縣衣帛布丹木付短弓矢」すなわち「その四年、倭王、また使大夫伊聲耆・掖邪狗等八人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・縣衣・帛布・丹・木付・短弓矢を上獻す」として、正始四年（二四三）に倭王が使大夫伊聲耆・掖邪狗等八人を魏に遣わした際の献上品のなかに「丹」がみえている。

以上のように魏志倭人伝には「朱丹」「丹」（二回出現）「鉛丹」として都合四度にわたって「丹」に関連する語が現れる。次にふれるように朱丹と丹はいずれも丹の同類異称であり、中国史書・文献では丹砂（丹沙とも表記）としてみえる物質であり、辰砂と総称される鉱物であることが定説となっている⁽²⁾。

これらの記述のなかで倭人が身体に塗った朱丹に関して、代表的な現代語訳では「丹（あかつち）」とあるのに対し、三品彰英氏は赤色顔料に利用される金属化合物の一種とし、朱は硫化水銀であり、丹は紅柄（べんがら）と呼ばれる酸化鉄を指すとし、『和名抄』に「丹砂似朱砂而不鮮明也」とあることから、朱が丹に比して一層良質であるとする。また、魏から卑弥呼の賜与品にある「真珠鉛丹」について、「鉛」を「鉛」と積字し、真珠は水銀朱であり、鉛丹は酸化鉄であるとし、これらを身体に塗る習俗として人物埴輪の彩色を参照し、古墳時代までこのような習俗が保持されていたとする。また、日本古代史料にみえる外国の賓客を受け入れる儀礼における赭（赤土）を顔に塗る俳優（わざおき）などをあげても非日常の化粧として位置づけた。真珠に関しては魏志倭人伝には真珠と推定される「白珠五千孔」を魏に貢献したとあることから、魏が真珠産出国の倭に大量に真珠を下賜したことに疑問としており、「真珠」を真朱の誤記とする根拠は「五十斤」という単位で表されている点にあるとした⁽⁴⁾。また、三品氏は「五十斤」に関して一斤は十六両と補注しており、現代の秤量での数値は示されていないが、三国時代の度量衡については定見をみないため、仮に漢代の一両を一四・一六七グラムとすると、「五十斤」すなわち八〇〇両はおよそ一一・三キログラムとなる。

古代の赤色顔料を包括的かつ体系的に研究した市毛勲氏は総称としての朱を総称とし、これらは水銀朱・ベンガラ（赤鉄鉱など）・鉛丹に大別し、さらに水銀朱は朱・銀朱・真朱・丹砂・朱砂・辰砂・丹などと呼ばれるとし、天然水銀朱である辰砂と、これを用いて人工的に製造した水銀朱があり、魏志倭人伝にみえる倭から魏への献上品である「丹」は水銀原料であるとした。また、「其山有丹」という記述の「丹」に関して、別の部分には卑弥呼から

魏への献上品としてあげられていることから「丹」はベンガラではないことを示すとし、「其山」は弥生時代の辰砂産地である大和水銀鉞床群・阿波水銀鉞床群を指すとした。そして、この「丹」関しては唐の『新修本草』にみえる仙薬としての「丹沙」に比して、品質の悪い辰砂が倭の「丹」であると推定した。「真珠鉛丹各五十斤」の「真珠」は魏志倭人伝の倭の魏への献上品としてみえる「白珠五千孔」とは異なり、「孔」は穴を穿つ意であるとして、この点からも「真珠」は「真朱」の誤写であり、人工水銀朱の粉末であると論じた⁶。また、後に「鉛丹」についても辰砂を指すと端的に述べている⁷。

大和岩雄氏は前期古墳から出土する三角縁神獸鏡と水銀朱との関係を論じたなかで、魏志倭人伝の「丹」についてもふれ、「山に丹あり」と記された「丹」は丹砂（硫化水銀）とベンガラ（酸化鉄）の双方を指し、倭人が「朱丹を以て身体に塗る」とあるのは山に「丹」が産出したからであり、景初三年に卑弥呼の魏への貢物のなかに「丹」があるが、これはベンガラでなく丹砂であると推定する。また、『続日本紀』文武二年に常陸など五国から朝廷に「朱沙」を献上したとあり、これは丹砂のことであるとすると、「真珠・鉛丹各五十斤」の真珠は、同じく魏志倭人伝に倭は「真珠・青玉を出す」とあるから、産地である倭に対して真珠を贈ることはないとしたうえで、「斤」を単位としていることから「真珠」は「真朱」であるとし、真珠を産する倭に対する下賜品として真珠を選ぶはずがないと断じ、「斤」という単位からも丹砂の精製品である「真朱」とする説を妥当とした⁸。

いっぽう「朱丹」の語について、佐伯有清氏は『三国志』魏書齊王芳伝の正始八年（二四七）十二月条の散騎常侍諫議大夫・孔父の奏に「天子の宮には斷鬚〔佐伯注・切り磨く〕の制あり、朱丹の飾り無し、宜しく礼に循って復古に復すべし」とする記述や『後漢書』大秦国伝に「土には金銀奇宝多く、夜光璧・明月珠・駭鷄犀・珊瑚・虎魄・琉璃・琅玕・朱丹・青碧有り」とあるのを引いて、同時代の用例をあげるとともに朱丹が貴重な産物であったことの証左とした。同じく魏志倭人伝にみえる「中国の粉」について、「粉」は白粉であるとして、『急就篇』卷三

の「脂粉」の「粉」を顔師古の注では「粉とは鉛粉及び粉份を謂う。皆、以て顔に傳（つ）け、光潔（佐伯注・なめらかでつやつやすること）を取るなり」とあるのを引いて、^⑪実物としては漢代の楽浪・王盱墓から出土した漆塗りの化粧箱のなかに収められていた円形盒子のなかに各々鉛の白粉と滑石の白粉が入っていたことから、中国古代の白粉には鉛粉と滑石粉があったと論じている。^⑫

中国の研究では王仲殊氏が紀元前後から一二世紀頃までの中国と日本との関係史を考古学的に整理したなかで、魏と倭との交渉にふれ、魏の下賜品としての「真珠」が貝類の体内で生成されるものではなく、水銀珠としての真朱であり、「鉛丹」と同種の顔料であつて、両者をあわせて正始元年に賜つたとされる「采物」の意味に解している。^⑬

先学の研究を引きつつ、ここまでみてきたなかでも、「特に汝に」に賜う物として、魏から卑弥呼に下賜された「真珠鉛丹各々五十斤」の「真珠」に関しては、先学の多くは「真珠」の誤字あるいは誤記とする。しかしながら、魏志倭人伝の文章のなかでも「制詔親魏倭王卑弥呼」で始まる魏が卑弥呼に与えた公文を漢から唐宋代にいたる同種の文章と比較検討した上で、通常は省略されることの多い「制詔」の語が残されていることなどから、この文章が漢代の制書の形式を踏襲しつつ、編者である陳寿がきわめて正確に引用し、確実な根拠がない場合は軽々に字句を誤記とすべきでないとする極めて妥当な見解があり、^⑭後に詳述するように本論でもこの考えに立脚して、「真珠」として以下に検討を行う。

二 中国史書・文献に見える丹砂・鉛丹

魏志倭人伝の丹・鉛丹を検討するにあたって、同時代を中心とした中国史書・文献にみえる関連する記述を参照し、これらを指し示す語の意味や変遷を把握し、後段の考古資料との相關的な考察に資したい。

(一) 丹・朱丹の用例と意味および関連語彙

まず、倭の山に産出すると記された「丹」は、この字を含む倭人伝のその他の語句解釈の基本となるため、これについてふれておきたい。

丹に関する語義解釈としては、まず、後漢・許慎『説文解字』に「丹は巴越の赤石なり」とされているのをあげねばならない。¹⁵これに対し、清・段玉裁の注では「巴・南越皆丹砂を出す」とあり、巴すなわち現在の四川省を中心として南越など南方の産物としての認識があつたことが知られる。また、丹は神仙思想に発して、初期の道教でも行われた煉丹術の基本的な要素である丹に関して『抱朴子』では丹を服するという文章が複数回にわたつて用いられており、これらによつて丹が仙薬・丹薬として服用されていたことがわかり、これに関しては詳述する。¹⁶

このような用例から丹の字句が一つの語として単独で用いられていることから、魏志倭人伝にみえる丹もこれらと同様の物質を指すことが証され、すなわち丹はすなわち丹砂を指すことが知られる。丹砂に関しては南朝梁の陶弘景『本草経集注』に項がたてられており、そこには「案ずるに此れ化して汞と為すに及んで真朱と名付けるは、即ち是れ今の朱砂なり」とあり、¹⁷丹砂が変化して汞すなわち水銀となつて真朱と名づけられ、これが朱砂であるとして、丹砂と真朱・朱砂の関係を説明している。これによつて丹の砂粒である丹砂と真朱・朱砂との本源的な関係性が知られる。なお、隋唐以前の時期には丹砂はまた「丹沙」(『史記』孝武本紀十二年、『史記』封禪書、『史記』貨殖列伝、『漢書』貨殖列伝、『隋書』経籍志医方など)と記されることがある。

いっぽう、これらに関連する語として辰砂があるが、この語は辰州(現在の湖南省懷化市一帯)で産出する丹砂が良質なこと起因するとされ、辰州の丹砂生産は『新唐書』地理志に「垂拱二年〔筆者注・六八六年〕以辰州麻陽縣地及開山洞置。土貢、光明丹砂、犀角」とあるように、唐代から盛んになることから、辰砂の語は、唐宋代以降に通用されるとみられている。¹⁸その後、辰砂の語は鉱物名として現用されるにいたっている。

すなわち、鉱物としては辰砂と呼ばれるが、唐宋以前（19）の史書・文献では丹砂・真朱などと呼ばれていたことがわかり、この他にも朱砂・汞砂などの呼称がみられることが知られている。本論では成立年代がよりさかのぼる『神農本草経』『抱朴子』などの文献に頻出する丹砂を用いている。ただし、後段でふれる考古資料については、報告書の表記を尊重し、辰砂の語も用いることとする。

朱丹に関しては前項でふれたように先学によつて、『三国志』魏書齊王芳伝や『後漢書』大秦国伝を引いて、「朱丹」という一語であり、かつ丹の一種であることが指摘されている。さらなる傍証としては『穆天子伝』に天子の賜物として「朱丹七十裏」とある例が参照される。『穆天子伝』は撰者・成立年ともに不詳であるが、西晋の太康二年（二八二）年に汲郡（河南省）にある古墳から発掘された古文書であるいわゆる汲冢周書の一つであり、この時点までには成立していたとみられる。以上のような用例から朱丹は朱と丹という二つの鉱物ではなく、朱色の顔料としての属性を主体とした丹の一種として間違いない。

用例についてみていくと、丹砂に関して、『管子』地数篇には桓公に対する管子の答えのなかに「上に丹沙あり。下に黄金あり」と記されており、丹沙すなわち丹砂が黄金とともに重視されていることがわかる。『神農本草経』玉石部上品および『神農本草経』を底本として南朝梁・陶弘景が撰述した『本草経集注』玉石三品・上品には「丹砂」として「味は甘く、微寒、無毒である。主に身体（21）の五臓百病を治し、精神を養い、安魂魄を安んじ、氣を益し、目を明け、血脉を通じ、煩満を止め、消渴を消し、精神を益す、あるいは中惡（卒中）・腹痛、毒瓦斯、疥（疥癬）・さまざまな瘡（できもの）を除き、久しく服用すれば神明に通じ、老いず、身を軽くし神仙となるとあり、能く化せば汞（水銀）となり、またの名を真朱といい、光色は如云母のようであるなどの特徴が記されている。（22）

東晋・葛洪の『抱朴子』内篇・仙薬では二十種類をこえる仙薬が列挙されているなかで、仙薬を上中下の三つに分け、そのうち「仙薬の上は丹砂」とあり、丹砂が仙薬としてもっとも重視されていた。（23）前漢・劉向の撰と仮託さ

れる『列仙伝』にも「能く水瀕を作り、丹と硝石と煉つてこれを服す。三十年にして反りて童子の如く、毛髮生じて皆赤し」とあり、⁽²⁴⁾仙薬としての丹砂や丹の効能が記されている。『列仙伝』には後漢代の地名がみえることから、後漢以降の作であり、⁽²⁵⁾四世紀前半頃までに成立したことが先学によって明らかにされていることから、⁽²⁶⁾後漢代以降には丹砂・丹が仙薬として認識されたことが看取される。

このほかに丹は化粧品として文献に現れる。たとえば、戦国時代の楚の宋玉の作とされる『神女賦』には「朱唇的其若丹」とあり、⁽²⁷⁾女性の唇を丹にたとえている。この文章はあくまでも比喩であるが、その後、後漢・劉熙の『釈名』⁽²⁸⁾釈首飾には「唇脂は丹を以つてこれを作る。唇を赤に象る」とあり、現代でいう口紅として用いられたとされている。

丹に関わる史料として『史記』貨殖列伝には巴の寡婦清が丹を得て、その利を擅（ほしいまま）にすること数世として、辰砂の発掘地を見つけた寡婦が巨利を得たため、秦の皇帝がその貞節を認めて客分として扱い、女懷清台という建物を築いてやったという有名な記述がある。⁽²⁹⁾

同じく、『史記』には各地の地勢や地誌などの記述において物産として、江南は出柎（くすのき）・梓・薑・桂・金・錫・連（なまり）・丹沙・犀・瑇瑁などを出す⁽³⁰⁾とあり、また、巴蜀もまた沃野でその地には卮・薑・丹沙・石・銅・鐵・竹・木の器などが豊富であると記されている。⁽³¹⁾これらの記述から前漢代にはすでに丹砂の産地に関心が集められていたことがわかる。

丹砂および関連する語については明・李時珍の『本草綱目』に諸書を引用して整理されており、後世一般に丹とは朱色を指すものとなっているところから朱砂という⁽³²⁾とあり、また、時珍は末にしたものを真朱とするのは誤りであり、同一の物を異なる名で呼ぶであろうかと疑義を呈しているが、⁽³³⁾これは合成物と区別するために接尾語としての真をつけていると補注されている。⁽³⁴⁾以上、本論で必要な範囲において、丹およびそれらの関連語彙とその用例を

示した。

(二) 鉛丹の用例と意味

丹がつく語でも「鉛丹」は水銀の化合物ではなく、鉛の化合物でとされる。中国古代の鉛に関する考察を参照すると、金属の鉛を空気中で焙炒すると黄色の黄丹すなわち密陀僧となり、さらに徐々に焙炒していくと鮮赤色の鉛丹になる。このように鉛は酸化によって色調が変化し、黄丹と鉛丹の他にも、酸化の度合いで白色の白鉛、茶褐色の黒丹がある。これらの四つの物質は加熱することにより色調が変わり、それが丹砂を焼くと水銀になり、水銀を熱すると丹砂（実際は硫化水銀すなわち辰砂）に戻るのと類似することから、同様の現象と捉えられていたとされる。文献にみえる鉛丹について『神農本草經』には「味は辛く微寒である」「煉れば化して、還つて九光を成す。久しく服すれば神明に通じる」などと記されている。⁽³⁶⁾ また、『抱朴子』内篇・金丹には「また桑子長丹法は、曾青・鉛丹を汞及び丹砂に混ぜ、銅の筒に入れ、乾瓦・白滑石でこれを封じ、白砂の中で八十日蒸す。小豆粒ほど飲めば三年で仙人になれる」とある。⁽³⁷⁾

南朝梁・陶弘景とされる『名医別錄』⁽³⁸⁾では小便を止めるに利あり、などの薬効とともに蜀郡に産出し、一名を鉛華といい、鉛から生ずると記されている。⁽³⁹⁾ 参考として時代は下るが明・李時珍の『本草綱目』でも時珍の説として鉛丹は元来甚だしい毒はないと述べられており、さらにさまざまな薬効があげられており、明代にいたつても鉛丹が無毒であり、なおかつ人体に有効であるという認識があったことがわかる。また、生成については独孤慆『丹房鏡源』という書を引きつつ、鉛一斤、土硫黄十兩、消石一兩を用いて、まず鉛を鎔かして汁にし、それに醋を点入して沸き立った時に硫黄一塊を投下して、少時して消石少量を投下し、やがて沸き切つて静まった時、前のように再び醋を点下し、少量ずつ硫黄と硝石を投下して末（粉末）になったものが丹である、と記されている。⁽⁴¹⁾ これによって明代には鉛丹の生成が本草学的に理解されていたことが知られる。

(三) 真珠の用例と意味

卑弥呼に対する魏の下賜品にみえる「真珠・鉛丹」のうち、研究史でふれたように「真珠」に関しては「真朱」を指すとされてきた。加えて丹砂の項でふれたように南朝梁の陶弘景『本草經集注』に丹砂が変化して汞すなわち水銀となつて真朱と名づけられ、これが朱砂であるとして、丹砂と真朱・朱砂の関係が示されており、真朱の語義が鉾物としての丹砂に由来するものとする見方があることにもふれた。真珠と真朱の錯誤に関しては医学史・薬学史からの研究があり、南朝から唐宋代の本草学・医学関係文献の用例と語義から考察が行われている。それによると真朱の語には一般的には朱砂を指し、これらは鉾物学的には辰砂であり、語義およびそれが指し示す物質は真珠とは異なる。真珠は文字通り貝類の体内で生成される真珠を指す場合と珍奇な玉・鉾物を表すことがあり、場合によつては朱砂を示すことがある。本草文献における朱砂としての真朱の初見は『名医別録』の「丹砂」の項目に「作末名は真朱と作（な）し、光色は雲母の如し」とある。いっぽう、本草薬の材料としての実際の真珠は『本草經集注』『名医別録』などにはみえず、初見は劉宋・雷敩の著作とされる『雷公炮炙論』であり、多くの場合は珍珠とも表記され、その通称名として用いられたとされる⁽¹⁴⁾。

また、真朱から真珠の語への誤用の過程についても、医学・薬学史の観点から論じられている。そのなかで本論に関わる考説に限定して摘要すると、唐・永淳二年（六八二）に孫思邈が撰した『千金翼方』では朱砂としての真朱といわゆる真珠が使い分けられていたが、天宝十一年（七五二）に王焘が撰した『外台秘要』では真朱すなわち朱砂が真珠と表記されているとされ、その後、明代の『本草綱目』でもこれが踏襲されているとして、真朱を真珠とする誤用が指摘された⁽¹⁵⁾。これを検証してみると『外台秘要』巻第七には引用文中ではあるが「真朱砂」の語があり、真珠とは区別されているとみられるため、全ての用例で真珠と真朱が誤用ないし混用されているとは言い難い⁽¹⁶⁾。ただし、真珠の用法に関しては、『千金翼方』『外台秘要』ともに類似した記述が頻出するが、より年代の古い『千

金翼方』を参照してみると、巻第五婦人一に「面膏方」の「右二十五味」として「乃納麝香及真珠末」、「澡豆方」の「又方」として「粉真珠」、巻第一〇傷寒下・陽易病已后勞復第七に「雜方府附」の「書生丁季受殺鬼丸方」として「丹砂・真珠・雄黄・雌黄」、巻第一一小兒・鼻病第四に「治鼻中息肉通草散方」として「通草半兩 硃石二兩 燒真珠一銖」、同じく「主目翳經年不愈方」として「琥珀一分 白真珠一分 珊瑚一分 紫貝一分 馬珂一分 朱砂二分」、巻第一九雜病中・痰飲第四に「葱白湯」の「右六味咀」として「納真珠服一升、得吐、止」、巻第二〇雜病下・備急第一に「真珠附著酸」に「主諸風鬼注毒氣猫鬼所着方」として「真珠・雄黄・丹砂各半兩」などの用例が散見される。すなわち、これらの記述によって、真珠は唐代には薬として丹砂や朱砂と並列して、同等に取り扱われており、また粉末にして飲用し、両・銖などの重さの単位で表記されていることが知られ、これは魏志倭人伝の真珠と共通する。また、薬としての真珠が粉末にされて服用されていることは、後述する丹薬としての真珠と共通する。

真珠の用例に関する研究を踏まえて、史書に現れる真珠の語の検索してみると、たとえば明代までの正史においては鉱物としての真朱の使用は寡聞にして知らない。いっぽう、中国史書・文献以外では『続日本紀』文武天皇二年（六九八）九月乙酉（廿八日）条に「令近江国献金青。伊勢国朱沙・雄黄。常陸国。備前。伊予。日向四国朱沙。安芸・長門二国金青・緑青。豊後国真朱」とあり、伊勢国の産物として朱沙、豊後国の産物として真朱があげられており、遅くともこの記事と並行する時期の中国では真朱の語が使用されていたと考えられる。

いっぽう真珠の語は正史の本文における使用としては『三国志』⁽⁴⁸⁾がもっとも古く、続いて編纂時期の古いものとしては『宋書』に翡翠などとともにあげられているように、主に衣服等の装飾に用いられている。⁽⁴⁹⁾その後、隋唐以降にも冠や帯などの装飾として現れ、⁽⁵⁰⁾語句としては『元史』⁽⁵¹⁾までみられる。このように真珠の語そのものは時代および編纂時期を問わずに用いられた一般的な語であることが知られ、このことは魏志倭人伝の真珠も真朱と読みかえるべきではないことを示している。加えて、すでにふれたように真珠の語を含む魏の明帝の制書は漢代の制書の

形式を踏襲しつつ、編者である陳寿がきわめて正確に引用したとみられ、魏志倭人伝のなかでも、とりわけ信頼性が高い部分とされ、確実な根拠がない場合は軽々に字句を誤記とすべきでない⁽⁵⁰⁾とされる。この所見に依拠するならば、後世の誤写等が証されないかぎり、原文どおりこの部分は「真珠」の積字をとるべきであろう。さらに同じ魏志倭人伝に記された倭の物産のなかに「真珠・青玉を出だす」とあり、また卑弥呼が魏に献上した物品のなかに「白珠五千孔」があり、これを真珠と解する見方があることはふれた。しかしながら、このような個別の解釈よりも字義としては同じく魏志倭人伝で「珠」とともに「朱丹」の語があるように、明らかに「珠」と「朱」とは区別して用いられている。関連して、魏志倭人伝に「出真珠・青玉其山有丹」とあることから、丹については山に産するが、真珠・青玉は産出地形等の同一性や類似性を示すのではなく、たんに倭の産物であることを述べているとみてよい。

これらの点から本論では積字を改変することなく「真珠」の語として考察する。「真珠」の語を検討する際に重要な点は「鉛丹」と併記され、かつ「五十斤」という単位で表されていることである。なお、後代の史料であるため、あくまでも参考であるが、唐・杜佑の撰になる『通典』食貨六・賦税下には安南都護府・珠崖郡の賦税として「貢銀二十兩 真珠二斤 玳瑁一具」とあり、銀二十兩とともに真珠二斤があげられている。これは魏志倭人伝の卑弥呼に対する下賜品にみえる「金八兩」「真珠・鉛丹各々五十斤」と記述の類同性が指摘でき、真珠に対して斤という単位を用いたことの傍証となろう。

また、丹砂などの重量に関して斤の単位を用いることは『列仙伝』に主柱が道士とともに宕山にのぼり、「言う、ここに丹砂有りと。数万斤を得可し」とみえることが参照される⁽⁵¹⁾。ここでは主柱が予測される丹砂の多さを斤という量詞で表している。いっぽう、同じく『列仙伝』でも後述する朱仲の項では三寸または四寸の大きな珠を「数十枚」と数えており⁽⁵²⁾、珠の状態によって数詞と量詞が使い分けられていることがわかる。

魏志倭人伝の「真珠・鉛丹各々五十斤」と『列仙伝』の「丹砂可得数万斤」は双方ともに数詞ではなく、量詞が用いられている点からも、量を単位とした同様の物品と認識されていたと思われる。そのうち上述のとおり「鉛丹」を丹薬の材料とすると、「真珠」も単なる装飾品とするよりは何らかの材料や素材であった可能性が考えられる。ここで参照されるのは魏志倭人伝と編纂時期のちかい東晋・葛洪の『抱朴子』内篇・仙薬に「真珠の直径一寸以上のものも服用できる。これを服用すると不老長寿になる。酪漿で真珠を漬けると化合して水銀のようになる。また、浮石・水蜂窠を化し、包形・蛇黄をこれに合わせると、長さ三、四尺にも引き伸ばせるようになる。丸薬にして服用し、穀物を絶って服用すれば不老不死となる」とある記述であり、不老長寿を期した仙薬としての真珠について述べられている。⁽⁵⁴⁾ここで注目されるのは「又真珠径一寸以上可服」とあることから、一寸以上のものの服用も可能であることを、ことさらに強調していることであって、それより小さな真珠はもとより「長久」すなわち不老長寿のために服用されていたとみてよからう。

珠の大きさに関連しては『列仙伝』の朱仲の記述があげられる。朱仲は会稽の市場で珠を売っていたが、高后の時に径三寸以上の珠を広く求めた際、三寸以上の珠を持ち、上書したところ、非常に優れていたので即座に五百金を下賜された。魯元公が七百金を朱仲に届け、珠を求めると、朱仲は径四寸の珠を献上し、宮殿の門前まで送り届けるとすぐに立ち去った。そこで書を下して会稽の役人に命じて朱仲を召しだそうとしたが、所在は知れなかった。景帝の時に朱仲はまた都へ来て径三寸の珠数十枚を献じたが、そのまま立ち去り、行方は分からなかった。⁽⁵⁵⁾ここでは三寸あるいは四寸の珠が珍重されており、それが数十枚におよぶというのは、単に装飾用というよりは『抱朴子』に述べられたような仙薬としての意味もあつたことが考えられなくもない。また、場面設定が南方の会稽であることと一定の大きさの珠が枚の単位で数えられていることも注目される。

そもそも真珠を含む珠を服用ないし食用することは漢代以前から行われており、たとえば『塩鉄論』散不足には

堯に示される往古の聖人の世と秦・始皇帝の治世とを比較して、後者を以下のように表している。すなわち、方士を重用して禪祥すなわち鬼神が与える禍福吉祥を信ずるようになると、盧生などに不死の薬を求めさせ、燕や斉の士は鋤鋤を捨てて仙人・方士のことを話し、都の咸陽に赴く者が千人にもものぼり、仙人は「食金飲珠」つまり金を食し、珠を飲んだ後は天地と同じ寿命を保てると言った。そこで始皇帝は五嶽や海のほとりに巡行し、仙人や蓬萊を探し求め、そのたびに行路となった郡県の富める者は財産を出し、貧しい人たちは道路を築くのに従った、とある。⁽⁵⁶⁾ここでは方術において不死を目的として「食金飲珠」が行われていたとする漢代の人士の認識が知られる。

同じく漢代の緯書にも同様の記述があり、『抱朴子』内篇・仙薬等に引用されている『孝経援神契』には「仙薬の上は丹砂、次はすなわち金、次はすなわち白銀、次はすなわち諸芝、次はすなわち五玉、次はすなわち五雲、次はすなわち明珠」以下の記述があり、仙薬としての明珠すなわち夜間に光を発する真珠をあげている。⁽⁵⁸⁾このような不死のための仙薬としての明珠の根源は『呂氏春秋』尽数の「精気の集まるや、必ず入る有るなり」すなわち精気が集まるのは必ず何かの物ものを対象としているという記述のなかで、羽ばたく鳥に集まればともに飛翔し、走獣に集まればともに活動するなどともに「珠玉に集まれば、精明となす」とあり樹木に集まればともに繁茂し、聖人に集まればともに明らかに良くなる、などの記述があり、⁽⁵⁹⁾これに象徴されるように珠や玉にも精気が集中すると考えられた。

このように遅くとも秦漢代には真珠を指す明珠やこれを包括した珠を服することによって、不老不死・不老長生を求めており、その展開のなかで『抱朴子』で真珠を仙薬と記しているのであって、魏志倭人伝の編纂時点においても同様の認識があったとみてよからう。

真珠の服用の方法はさきにふれたとおり、『千金翼方』『外台秘要』などの唐代の医書にも服用の記述が頻出する

とともに、さらに時代が下るが、明・李時珍の『本草綱目』に「真珠末」（草之九、介之二）、「真珠粉丸」（木之二）、「真珠粉」（介之二）などがあり、また「真珠一錢。為末、糯米粥丸芡子大。每服一丸」（金石之三）とあることから、粉末にし、あるいはそれを練るなどして丸薬として服用していたことが参考になる。⁽⁹⁾

以上の中国史書・文献にみえる真珠は、生成する貝種は不明とするほかはないが、それらが淡水・海水に棲息するに関わらず、当然ながら形や大きさが一定でなく、基本的には矮小なものが主体となる天然真珠である。⁽¹⁰⁾ このことを勘案すると、『列仙伝』のように大きな珠については「数十枚」などの語を用い、かつ『抱朴子』内篇・仙薬から解される一寸以下のものは仙薬とされることから、個体ごとではなく魏志倭人伝の「五十斤」のような量詞が用いられており、かつ服用の際に粉末にした可能性が考えられることから、⁽¹¹⁾ これらが装飾用ではなく仙薬としての天然真珠であることを証している。

以上のような釈字と語意の時代的変遷とそれらを示す典拠さらに丹薬としての記述を根拠とすると、魏志倭人伝に「出真珠・鉛丹五十斤」としてあげられている「真珠」は鉱物としての「真朱」ではなく、まさしく貝類に由来する「真珠」である。ただしすでにふれた正史に現れるような装飾用の真珠とは異なる品質であることを想定し、その用途は併記された鉛丹と同じく仙薬・丹薬であったと推定しておきたい。

三 考古資料にみる丹砂と鉛丹

語句としての丹砂・辰砂は基本的には時期による呼称の違いであることを述べた。ここでは鉱物名として辰砂を用い、自余は報告書等の表記を尊重し、以降の論旨に関係する考古資料のうち、丹砂使用の痕跡を顕著に示す事例を中心として時期ごとに瞥見していきたい。⁽¹²⁾

（一）丹砂に関する考古資料

丹砂すなわち辰砂のもつとも早い出土例としては新石器時代の彩陶とされる彩色土器の顔料として使用されていることが知られ、たとえば紀元前五〇〇〇年頃とされる甘肅・泰安大地湾遺跡や浙江・河姆渡遺跡などの彩陶があげられる。これ以降器物や繊維などの顔料としての使用例は多く、とりわけ漢代の資料は数多く知られており、絵画や装飾などの顔料のほかにも前漢初期の長沙・馬王堆一号墓から出土した絹織物の染色に辰砂が用いられているという分析結果が出ており、多様な顔料・染料として丹砂・辰砂が用いられていたことが知られている⁽⁶⁴⁾。

このような顔料としての事例は数多いが、遺物に残存する顔料として三国時代にいたる丹砂・辰砂の生活や文化面での意味を示す遺物や語句などの検討による社会的、宗教的認識を知るところを目的とする本論では多くを割愛したい。

葬送に関わる事例は古く、新石器時代の墓では遺骸に辰砂が付着した例が知られている。詳細が報告されない場合も多いが、たとえば、新石器時代晩期の齐家文化（紀元前二四〇一六世紀頃⁽⁶⁵⁾）に属する青海・楽都柳湾遺跡では木棺墓（M三一四・齐家文化晩期）に埋葬された男性と推定される人骨の下に辰砂（報告では硃砂）が散布された状態であった⁽⁶⁶⁾（図1-1）。

先秦時代以前では墓から出土する玉器などに辰砂などの赤色顔料が付着していることが知られるが、時期的にはやい例として新石器時代末から青銅器時代初期（紀元前一九〇一五頃）とされる河南・偃師二里头遺跡の墓の一部では、副葬品などは盗掘によって失われていたにもかかわらず、墓底には大量の辰砂（報告文では硃砂、図・写真等は掲載されていない）が残存していた。加えて、近傍から出土した玉器には辰砂が付着していたことから、副葬品とともに辰砂を埋納するという用い方の一端が知られた⁽⁶⁷⁾。

殷代の大型墓である殷墟・婦好墓（小屯第五号墓）からは小型の玉製白（高さ二三・二センチメートル、直径一六センチメートル）と玉製杵（長さ二八センチメートル、直径七センチメートル）が出土したが、白には丹砂が付

着していたことから、墓主が用いた化粧道具である可能性があるとされている(図1―2)。報告書では婦好は殷第二二代の王である武丁の妻子の一人と推定されており、時期としては紀元前一三世紀末から一二世紀初め頃とみられ、殷代には丹砂を化粧品として用いたことが知られた⁽⁶⁸⁾。

山東・滕州前掌大遺跡で発掘された一一基の墓群は商代晩期から西周代初め頃にかけての造営と推定され、近傍にある商代から西周代の薛国と関係する墓地とみられている。墓の構造はいずれも土坑竪穴木槨墓であり、埋葬施設は一槨一棺であったが、そのうち各々西周代初め頃と商代晩期頃とされる三号墓と四号墓(報告書付表の北Ⅰ区M3とM4)では棺底に丹砂(報文では朱砂)が敷かれており、とくに四号墓(図1―3)では約六センチメートルの厚みに達するとともに、その間には海棲の貝が混ぜられていた⁽⁶⁹⁾。

山東・長清仙人台遺跡は西周代末から春秋時代の邾国の高位階層墓地とみられ、六基の土坑竪穴木槨墓が調査されたが、いずれの墓も木棺の底には厚さ約二センチメートルの丹砂(報告書では朱砂)が敷かれていた(図1―4)⁽⁷⁰⁾。

化粧品としての辰砂の例として連雲港海洲で発掘された前漢・霍賀墓から出土した化粧用の漆奩(図2―1)の内部に紅色の粉が発見されており、分析の結果、天然鉱物の辰砂と鑑定された⁽⁷¹⁾。

湖南・長沙馬王堆一号漢墓の被葬者は初代軫侯である利蒼の妻と推定されているが、その遺骸の腸内からは辰砂、肝臓・腎臓からは塩化第二水銀、頭髮中からは黒辰砂と三種類の汞(水銀)が検出されており、棺中の液体よりも尸や骨の中の含有量が多いと報告されている⁽⁷²⁾。これに関して、明代の『本草綱目』の記述をあげて、丹砂や水銀は強い殺菌力により治病の薬として用いられることが指摘されており、腐敗していない死体の例にも丹砂など鉱物性の薬物のもつ殺菌力による防腐作用が関与していた可能性が高いことが指摘されている⁽⁷³⁾。また、馬王堆一号漢墓からは実物の朱砂の他に医学書・本草書である『五十二病方』の竹簡が出土しており、そこには丹および丹砂が薬品

として用いられた記述があり、「白處」という一種の皮膚病には丹沙と鱧という魚の血または鶏の血を取って用い、「般」という傷跡には「水銀」と「男子惡」という未詳の物質および「丹」を各々二・四・一の割合で混ぜ合わせて、二、三日置いたものを用いるとよいとあり、他にも顔面にできる創痕状のものを治すには丹を合わせ用いることなどが記されている⁽⁷⁴⁾。

馬王堆三号墓では図版等は掲載されていないが、実際に複数の箇所から薬物が出土していることが報告されている。そのうち内棺に置かれた絹袋から朱砂が出土しており、科学的な鑑定の結果、丹砂と報告されている⁽⁷⁵⁾。前漢代の薬物としての丹砂利用に関しての重要な事例である。馬王堆三号墓は一号墓の墓主である利蒼の子の墓とされ、築造年代は前漢文帝一二年（紀元前一六八）の紀年木簡の年次を下限すると推定されており、前漢代の比較的に時点で丹砂が薬品として用いられていたことがわかる⁽⁷⁶⁾。

後漢代に盛行する朱書陶瓶は陶製の壺などの外面に邪気の侵入を防ぎ、墓を鎮めるいわゆる鎮墓文が記されていることが特色であり、多くの資料が蓄積されている。そのなかで、丹砂の語そのものがみられる例として咸陽市出土の後漢・永平三年銘陶瓶朱書には八行に及ぶ銘文が記されており、その文章には「永平初三年十月／九日丙申黃神使者□地置／根為人立：（中略）：建立大鎮慈畧雄黃曾青丹砂五石会精戾葉輔神／冢墓安寧解：（後略）」⁽⁷⁷⁾は改行を示す⁽⁸⁰⁾とあり（図2-2）、慈・畧・雄黃・曾青・丹砂の五石を用いて鎮とする旨が記されている。鎮とは道教における靈物の一つであり、地下の魑魅を鎮めるものであり、その意味でいわば地鎮の役割をもつものとされる⁽⁸¹⁾。よって、「建立大鎮」とは大いに地鎮を行うというほどの意味であろう。このような神仙思想に基づいた初期の道教的信仰による地鎮に五種の岩石・鉱物である「五石」が用いられ、その一種として「丹砂」が含まれている⁽⁸²⁾。ここでいう五石は『抱朴子』金丹に「五石は丹砂・雄黃・白畧・曾青・慈石なり。一石すなわち五転して各々五色となり、五石にして二十五色⁽⁸³⁾」としてみえ、金丹すなわち丹薬として五種の鉱物があげられている。おなじく金丹

には「また墨子丹法、汞および五石液を銅器中に用い、これを火熬し、鉄匕を以てこれを撓し、十日すれば丹に還る。これを一刀圭服すれば、万病身を去り、長く服せば不死となる」とあり、五石が丹薬の材料であるとも記されている。そもそも五石の薬効は『周礼』天官冢宰に「およそ療傷は五毒を以てこれを攻す」など⁽⁸⁴⁾とあり、これに対する鄭玄注には「これを作すに黄を合し、石胆・丹砂・雄黄・磐石・慈石をその中に置き、これを三日三夜焼き、その烟上に著けば鳩の羽を以てこれを取り、以て創に注げば、悪肉骨を破りてすなわち尽く出る」とあり、五種の鉱物を調合すれば薬効があることが記されている。⁽⁸⁶⁾『史記』には齊王の侍医が病になつた時に、自ら五石を練つてこれを服した、とあり、これに対して太倉公淳于意が診たてた言葉として、公は病中にして熱があり、論には中熱は洩せざるは五石を服してはいけない、と反論している。⁽⁸⁸⁾これらの記述によつて五石は『史記』の編述された漢代には、すでに鉱物性の薬としての石薬として知られており、それが神仙思想の展開とともに丹薬として重用されるようになる。

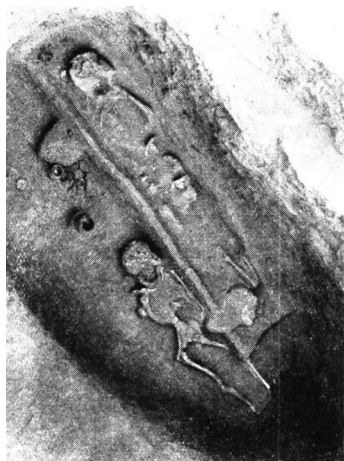
このような丹薬に関する考古資料としては、山東・曹植墓（山東省東阿県）で有名陶罐が出土している。曹魏の東阿王曹植の墓と伝えられる墓であり、構造的は磚室墓で、墓内に置かれた棺内に雲母を敷き詰め、その上に遺骸を安置していた。棺の内部は三層の堆積物が認められ、底層は厚さ約三センチメートルの厚さで木炭の灰を敷き、中間層には大きさが豆ほどの朱砂を施して、その上層には日月星辰の模様を造つて薄く切られた雲母片を置き、その上に遺体が安置されていた。遺骸は雲母片の上に置かれていたが、発掘時点では一部を除いて腐朽していた。陶器のなかには肩の部分に「丹薬」銘の印刻のある四耳罐があり⁽⁸⁹⁾（図2-3）、この墓の葬送思想には神仙思想あるいは道教的信仰が存在したことを示している。棺の内部に敷き置かれた雲母も、遺骸保存の目的があつたと考えられるが、その行為は陶罐の「丹薬」銘に示されるような神仙思想とおよび道教的信仰によるものであることが類推できる。

東晋代の王氏一族の墓として知られる南京・象山三号墓は棺内から出土した漆盒からは呈朱紅色を呈した直径〇・四〇・六センチメートルの丸薬が二〇〇粒余り出土しており、主要成分は硫化水銀であることがわかっており、丹薬であることが判明した(図2-4)。三号墓の被葬者は王彬の長女で東晋・升平三年(三五九)に没した王丹虎であることがわかつている。⁽⁹⁰⁾

最近発掘された南京・板橋東晋墓で出土した三足瓷盤の上面から十余個の紅色丹丸が出土しており(図2-5)、六朝期の士大夫たちの間で流行した「不老仙丹」と報じられている。速報の段階であるため詳細は報告をまちたいが、この墓からは「墓母穌」の三字が陽刻された銅印が出土しており、印の持ち主すなわち被葬者の名であり、この名は『晋書』の武帝の詔書にみえ、墓主と推定されている。⁽⁹²⁾

丹丸と関連して前漢武帝代頃と推定されている四川・綿興双包山前漢墓では銀白色の鉈物塊が出土しており、⁽⁹³⁾科学的分析の結果、金が主であるが高い比率で水銀が検出されており、経脈を示す人体を模した漆製品などが出土していることを勘案して、煉丹の過程で生成された金と水銀の合金として最も時期のさかのぼる遺物とする説が示されている。⁽⁹⁴⁾

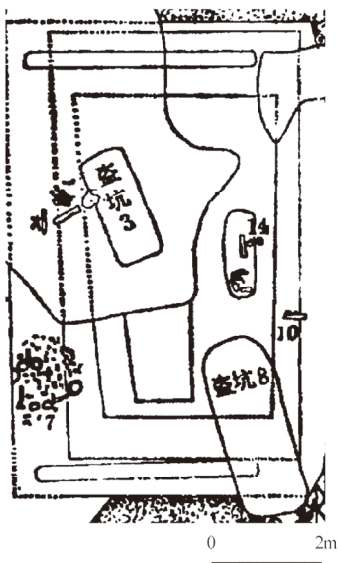
時代は下るが唐代の金銀器などを主体として一〇〇〇個体以上の遺物が出土したことで知られる西安・何家村窖藏では、金銀器以外にも医薬関係の遺物が出土している。⁽⁹⁵⁾ 鉈物としては丹砂・石鐘乳・紫石英・白石英・金屑(別名は黄粉)・密陀僧(別名は黄丹)などがあり、これらに関して、遺跡の報文とは別に解説が行われており、それによると丹砂は鉈物学的には辰砂であり、その名は『周易参同契』にみえ、『道藏』や本草学の諸書にみえる丹沙の材料であることと宋・范成大の『桂海虞衡志』に各地の丹沙の産地と産地ごとの丹沙の特色が記されていることとにふれている。さらに何家村窖藏から出土した鉈物の種類から、唐代には煉丹術に熱心な上位階層が存在し、この窖藏を設けた人物本人もそのような活動を行っていたと推測している。⁽⁹⁶⁾



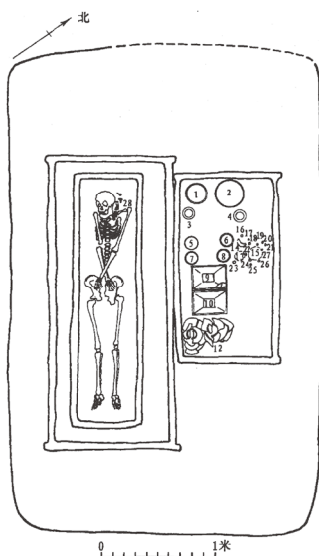
1 青海・楽都柳湾遺跡木棺墓M 三一四
(丹沙出土位置の表示なし)



2 殷墟・婦好墓玉製臼(左)・杵(杵)

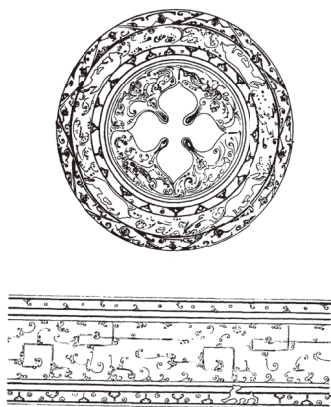


3 山東・滕州前掌大遺跡四号墓
(丹沙出土位置の図示なし)

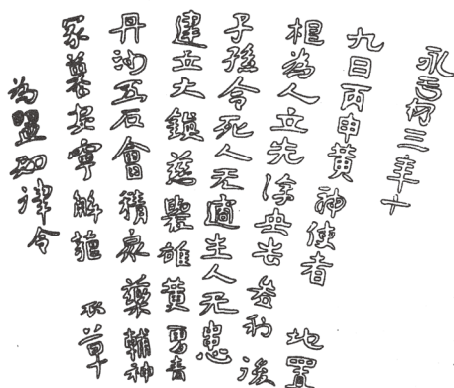


4 山東・長清仙人台遺跡3号墓
(丹沙出土位置の図示なし)

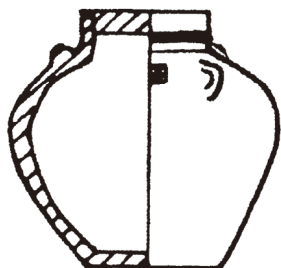
図1 丹沙関係考古資料(1)



1 前漢・霍賀墓漆奩

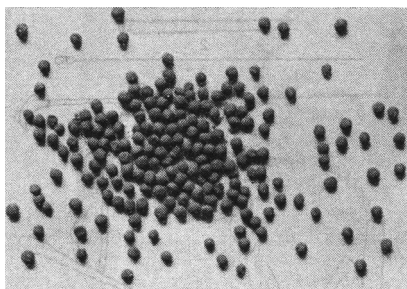


2 咸陽市出土後漢・永平三年銘陶瓶朱書



3 山東・曹植墓出土遺物

左：「丹藥」印刻銘のある陶罐（口径4.5 高さ19.8） 右：「丹藥」印刻銘（一片2.5）



4 南京・象山三号墓丸藥



5 南京・板橋東晋墓丹丸

図2 丹関係考古資料（2） 縮尺不同

(二) 鉛丹に関する考古資料

上記の丹砂・朱砂などの辰砂に比して鉛丹に関わる考古資料は稀である。ここまで述べてきたように鉛丹が煉丹術に用いられたとしても、他の物質と反応ないしは混合させるわけであるから、鉛丹そのものが物質として残存する場合は少ないと考えねばならない。いっぽうでは近年の科学的分析の多用によって、絵画や装飾に用いられた彩色に用いる顔料としての鉛丹が明らかになってきている。

そのうち、時期が確定する事例として、注目されるのは秦始皇帝陵の兵馬俑の彩色の科学的分析であり、紅色の顔料に鉛白と鉛丹の両種の鉛の化合物が用いられていることがわかつている⁽⁹⁷⁾。これによって遅くとも秦代には鉛丹の製造が行われていたことが知られる。漢代の壁画顔料の科学的分析結果もいくつかの例があり、たとえば陝西・旬村後漢壁画墓では紅色顔料の一種が鉛丹を人工的に製造する際の過程で生成する物質を用いている可能性が指摘されている⁽⁹⁸⁾。

すでにふれたように鉛丹は人工的に作られた物質であることから、これが検出されることは当初から顔料として意図的に製造されたうえで用いられていることを示しており、魏志倭人伝をはるかにさかのぼる時期から顔料として重用されていたことがわかる。

以上のように三国時代以前の中国において、丹砂すなわち辰砂および鉛丹は実際の薬効を期待された薬品やさらには不老不死のための丹薬として用いられ、これらは顔料としても使われていたことが明らかになった。

四 丹・鉛丹・真珠にみる倭国観

既述のように『神農本草経』およびその注釈書である『本草経集注』には丹砂に関して、火で錬成して久しく服用すれば神明に通じ、老いず、身を軽くし神仙となる、という内容の記述があり、また、『抱朴子』にも丹砂が丹

藥・仙藥であることが記されている。いっぽう鉛丹も同様に丹藥の材料として煉丹に用いられた。後漢代には神仙思想が展開することあわせて、これらの記述からはすくなくとも後漢から南朝にかけて、丹砂や鉛丹が丹藥・仙藥として認識されていたことは、すでにふれた神仙思想・初期道教や煉丹の研究からも明らかである。

出土資料においても、丹砂は東晋・王丹虎墓などの例から丹藥であることは明らかである。いっぽうでは前漢・霍賀墓出土例では丹砂が化粧品として用いられていたことがわかり、漢から六朝にかけての丹砂使用の実態が知られた。

このように文献と出土資料の双方から丹砂や鉛丹の丹藥・仙藥としての使用が知られ、これらと前後して編纂された『三国志』には倭では朱丹を身体に塗る風習があり、また、山には丹を産すると記されており、これに対応して、魏は卑弥呼に鉛丹や丹を下賜していると考えてよい。そして、漢墓からの出土例をあげたように丹砂・辰砂は化粧品であることが、身体への塗布という倭人の風習を理解する背景となったのであろう。

これらを勘案すると、魏は倭が丹すなわち辰砂を多用する国であると認識したうえで、丹やそれと同種の丹藥の素材である鉛丹を下賜したと推定される。倭が丹砂の産地であり、加えて倭人が丹砂を身体に塗布するなどの習慣をもつことを認識した魏が下賜品として丹と丹藥の材料という点でその類品である鉛丹を倭に下賜したのであろう。すなわち、卑弥呼に下賜された鉛丹やその後、倭に与えられた丹は不老不死を期する丹藥あるいは仙人になるための仙藥の材料であり、これらがすでに倭において広く行われていたという認識に基づいた魏からの下賜品であったとみてよい。

魏志倭人伝におけるこのような理解の背景としては、日本列島における縄文時代以来の辰砂（日本考古学では水銀朱とされる場合が多い）の利用があり、弥生時代には生産遺跡と精製用具が発見されており、倭における丹などの利用に関する魏志倭人伝の伝聞の背景となった可能性が考えられる。

いっぽう、鉛丹とともに量を単位として卑弥呼に下賜された「真珠」に関しては、これを真朱と読み替えるのではなく、字義どおり真珠と解し、「五十斤」という量の多さを勘案すると、器物や身体装飾用にたえうる視覚的な品質をそなえない程度の真珠であり、魏志倭人伝と時期的にもちかい『抱朴子』にみえる仙薬としての用法を想定した。「真珠・鉛丹」の「真珠」を「真朱」と読み替える説では、魏志倭人伝に「真珠・青玉を出だす。其の山には丹有り」とあり、真珠の産地である倭に対して、魏が真珠を下賜するとは考えられないことを有力な根拠としてきたが、精製した丹砂である「真朱」と解釈しつつ、「其の山には丹有り」の部分に関する積極的な解釈はみられない。すなわち魏志倭人伝では倭の産物として「真珠」「丹」の両方ともが記されているのに対し、真珠のみをとりあげ、産地である倭に対して魏が下賜するはずがないとし、もう一方の「真朱」については倭が丹砂の産地であることは問題にしないのであるから、このような解釈には矛盾と自己撞着があるといわざるをえない。むしろ倭において丹を産出することを前提として、丹薬の原料である鉛丹が魏から下賜されていることは、同じく倭で産出することを踏まえて、魏が真珠を下賜したことの具体的証左となろう。

このような真珠の産地としての倭に関する記述の背景を考定するに際して参照されるのが、『漢書』武帝紀の元鼎六年（紀元前一一）に西南夷を平定し、越地を定めて、南海・蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九真・日南・珠崖・儋耳などの郡としたという記事に関する応劭の注に二郡は大海中崖岸の辺にあり、真珠を出し、ゆえに珠崖とする記事で、朱崖の地名の由来として真珠の産出があげられている。ここにみえる珠崖とは儋耳とともに魏志倭人伝に「有無するところ儋耳・珠崖と同じ」としてみえる地域であって、倭の産物の有無が儋耳・珠崖と同じであるとしてみえる地域であり、儋耳・珠崖の両郡とともに現在の海南島に比定されているように、中国東南部の亜熱帯に属する温暖な地域である。『列仙伝』朱仲の話で場面設定が南方の会稽であったことも、また珠の産地が中国東南沿海地域であったという認識を示すものであろう。珠崖の真珠については、『通典』食貨六・賦税下に安南都

護府・珠崖郡の賦税として「貢銀二十兩 真珠二斤 玳瑁一具」とあり、唐代にいたっても産地として知られたことはすでにふれた。

これらを参照するならば、倭の物産はこのような儋耳・珠崖と同じであつて、さらに「会稽・東冶の東にある」すなわち越の東に存在するという魏志倭人伝の記述ともあわせて、すでにいわれているように『三国志』における倭の地理と環境・風土に関する認識が看取される。すなわち、『三国志』では倭と儋耳・珠崖の地域に対して同様の環境や風土を想定していたのである。あくまでも推定の域を出ないが、『三国志』におけるこのような地域観によるならば、倭は真珠を産する中国東南部に類する地域であり、さらには丹を産出し、これを丹薬・仙薬として用いたという認識に基づいて、倭に対して仙薬としての真珠を下賜したものとする見方も可能となろう。

以上、縷々述べてきたように魏志倭人伝にみえる朱丹を含めた丹と鉛丹について、倭が丹の産地であり、かつ倭人は身体に塗布するという風習があるほどに丹を広く用いたという地誌的かつ文化的な理解に基づいて、魏は卑弥呼や倭に対して丹や鉛丹・真珠という丹薬・仙薬の材料を下賜したことを同時代の中国の史書・文献と考古資料の双方を用いて論じてみた。

結 語

本論では魏志倭人伝にみえる倭の産物や倭人の習俗としてみえる顔料である丹・朱丹と魏への遣使に対して卑弥呼に下賜された鉛丹・真珠について、できうるかぎり同時代の中国史書・文献と考古資料を参照して同時代的な位置づけとそれに基づく解釈を行った。以下に行論にそつて摘要することによって論を結ぶこととしたい。

まず、魏志倭人伝にみえる朱丹・丹や鉛丹・真珠などに関する研究史を整理し、朱丹・丹が鉱物的には辰砂とされる物質であり、中国史書や文献では主として丹砂（沙）としてみえることの多いことを確認したうえで、「真珠」

に関してはこれを「真朱」と読み替える説に対し、魏志倭人伝のなかでも、もつとも信憑性が高いとされる制詔すなわち詔書にみえる語であることから、そのまま「真珠」と解する立場を示した。

次に中国史書・文献にみえる丹砂・鉛丹・真珠および真朱について用例を示し、意味を解した。丹砂については漢代には南方に産するという意識があることを『説文解字』『史記』などによって示し、その後、神仙思想および初期的な道教の展開のなかで丹薬の材料として珍重されることを『抱朴子』『本草経集注』などを引いて論じた。

また、鉛丹については自然界には存在しない鉛の化合物であり、錬丹術に用いられる金丹の材料の一つであることを確認した。真珠に関しては真朱の語との混用に關しての近年の研究によりつつ、唐代の七世紀末には朱砂としての真朱と真珠とが使い分けられていたが、八世紀中ごろには真朱と真珠が混用され、真朱の語は正史においては明代以降にみえ、その他では『続日本紀』に七世紀末の記述としてみえるのが古く、これらは真朱と真珠の混用の実態を示している。このような点からも魏志倭人での真珠を誤写ないしは真朱の誤写ではないと断じた。また、真珠を含む珠は漢代以前から不死の薬としてみえ、『抱朴子』に仙薬の材料としてみえ、魏志倭人伝に「斤」という量詞を用いられているのは装飾用の品質を満たさない真珠を丹薬・仙薬の材料として下賜したものと考えた。

このような史書・文献の用例・用法を踏まえて、同時代を中心とした中国における丹砂・鉛丹に関する考古資料を参照し、丹砂は新石器時代以降に顔料として用いられ、殷周代には埋葬施設や土坑などに敷かれた状態で検出されており、前漢代には化粧品や医薬品として用いられ、後漢代には鎮墓に用いられ、魏晋南北朝代には丹薬としての実物資料が出土している。鉛丹も遅くとも秦代には顔料として用いられた。

以上を踏まえて、魏志倭人伝に記された丹・鉛丹・真珠に關して、倭が丹の産地であり、かつ倭人は身体に塗布するという風習があるほどに丹を広く用いたという地誌的かつ文化的な理解に基づいて、魏は卑弥呼や倭に対して丹や鉛丹・真珠という丹薬・仙薬の材料を下賜したことを同時代の中国の史書・文献と考古資料の双方を用いて論

じた。加えて真珠が儋耳・珠崖などの中国東南沿海地域の特産であり、魏志倭人伝に「有無するところ儋耳・珠崖と同じ」とあることから、倭の真珠に関する叙述の背景として、倭に対して、これらの東南沿海との地理的、地誌的認識があつたと考えた。

本文中でもふれたように丹砂・辰砂は日本考古学で水銀朱と呼ばれることが多く、これらが付着した遺物は縄文後期から知られており、とくに縄文後期にさかのぼる辰砂の精製と使用に関する資料として、精製に用いた石器・辰砂原石（三重県森添遺跡、同・天白遺跡）⁽¹⁰⁴⁾が知られており、その後、弥生時代には辰砂精製遺跡として弥生時代後期から古墳時代前期に及ぶ採掘遺跡である若杉山遺跡（徳島県）⁽¹⁰⁵⁾が知られている。これらの調査成果を受けて、弥生時代から古墳時代にかけての社会的変化との関連も論じられている。⁽¹⁰⁶⁾本論ではあくまでも魏志倭人伝の編纂時点における同時代的知見や認識を明らかにすることを目的としており、このような本論の趣旨と内容が三世紀代の魏と倭の相互認識の同時代的研究から、さらには弥生時代から古墳時代の考古資料としての水銀朱研究の一助となることを期待しつつ稿を閉じたい。

註

- (1) 石原道博編訳『魏志魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝―中国正史日本伝(1)―』(岩波書店、一九八五年)八〇頁など。
- (2) 本論では丹・朱丹・朱砂などを包括して丹砂の語を用い、鉱物名としては辰砂を使用する。なお、辰砂は日本考古学では水銀朱と呼ばれることが多い。
- (3) 石原道博編訳『魏志魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝―中国正史日本伝(1)―』(岩波書店、一九八五年)八二頁
- (4) 三品彰英『邪馬台国研究総覧』(創元社、一九七〇年)一〇六―一〇七頁
- (5) 小泉契娑勝『歴史の中の単位』(総合科学出版、一九七四年)なお、漢代を含めた度量衡の諸説についての近年の整理は下記参照。丘光明編著『中国歴代度量衡考』(科学出版社、一九九二年)(中国語文献)
- (6) 市毛勲『朱の考古学 新版』(雄山閣出版、一九九八年)初版は一九七五年

なお、「真珠」が「真朱」の誤写とする説は、すでに一九六〇年の下記の論考で提示されている。市毛勲「辰砂考」(『古代学研究』二三、一九六〇年)

- (7) 市毛勲「辰砂と若杉山遺跡と邪馬台国」徳島県立博物館編『辰砂生産遺跡の調査・徳島県阿南市若杉山遺跡』(徳島県立博物館、一九九七年)

- (8) 大和岩雄「三角縁神獸鏡と神仙思想と水銀朱」(『東アジアの古代文化』98、一九九九年)

- (9) 『三國志』卷四・魏書四・三少帝紀第四・齊王芳／正始八年

- (10) 『後漢書』西域伝第七八・大秦

土多金銀奇宝、有夜光璧、明月珠、駭鷄犀、珊瑚、虎魄、琉璃、琅玕、朱丹、青碧。

- (11) 『急就篇』卷三・芬薫脂粉膏沢箱の顔師古注に「粉謂鉛粉及米粉皆以傅面取光潔也。粉之言分也」とある。

- (12) 佐伯有清「魏志倭人伝を読む」下(吉川弘文館、二〇〇〇年)一四二～一四三頁

- (13) 王仲殊「関于〈魏志・倭人伝〉、〈後漢書・倭伝〉的標点的解釈」(『古籍整理与研究』七、一九九二年)(中国語文献)

王仲殊「論洛陽在古代中日關係史上的重要地位」『中日両国考古学・古代史論文集』(科学出版社、二〇〇五年)

- (14) 「初出は二〇〇〇年」(中国語文献)
- 大庭脩「第六章 卑弥呼を親魏倭王とする制書」『古代中世における日中關係史の研究』(同朋舎出版、一九

九六年)

- (15) 『説文解字』卷六・丹部
- 丹巴越之赤石也。

- (16) 『抱朴子』内篇・对俗
- 仙經曰、服丹守一、與天相畢、還精胎息、延寿無極。此皆至道要言也。

『抱朴子』内篇・金丹

元君者、大神仙之人也、：(中略)：天下衆仙皆隸焉、猶自言亦本學道服丹之所致也。

『抱朴子』内篇・金丹

(前略)：欲食去屍藥、當服丹砂也。：(後略)

『抱朴子』内篇・仙藥

(前略)：欲食去屍藥、當服丹砂。

- (17) 『本草經集注』玉石三品・上品／丹砂
- 案此化為汞及名真朱者、即是今朱砂也。

- (18) 李仲均「中国古代文献中記載の汞鉍產地」(『有色金属』三三一四、一九八一年)(中国語文献)

胡安徽・護華語「歴史時期武陵山区丹砂產地分布及其變遷」(『中国歴史地理論集』二六―四、二〇〇一年)(中国語文献)など。

- (19) 貴州汞鉍・黄家柱「朱砂漫話」『有色冶煉』(一九八六年第三期)(中国語文献)

王進玉・王進聰「中国古代朱砂の応用之調査」(『文物保護与考古科学』一一一、一九九九年)(中国語文献)

沈澍農「真朱与真珠の名称沿革与古今錯乱考」(『中華医史雜誌』三〇―一、二〇〇〇年)(中国語文献)

周国信「中国辰砂及其發展史」(『敦煌研究』二〇一〇年第二期)(中国語文獻)

(20) 『穆天子伝』卷三

天子賜之黄金之罍、貝帶、朱丹七十裏。

(21) 『管子』地数

上有鉛者、其下有銑銀、上有丹沙者、其下有銑金。

(22) 『神農本草經』玉石部上品・丹砂

味甘微寒。治身体五臟百病。養精神、安魂魄、益氣、明目、殺精魅邪惡鬼。久服通神明不老。能化為汞、生山谷。

『本草經集注』玉石三品・上品・丹砂

味甘、微寒、无毒。主治身体五臟百病、養精神、安魂魄、益氣、明目、通血脉、止煩滿、消渴、益精神、…除中惡、腹痛、毒瓦斯、疥、諸瘡。久服通神明不老、輕身神仙、能化為汞、作末名真朱、光色如雲母：

(23) 『抱朴子』内篇・仙藥

仙藥之上者丹砂、次則黄金、次則白銀、次則諸芝、次則五玉、次則云母…(後略)

(24) 『列仙伝』赤斧

能作水瀕、丹與硝石服之、三十年反如童子、毛髮生皆赤。

(25) 福井康順「列仙伝考」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』三、一九五七年)

沢田瑞穂「列仙伝解説」本田濟・沢田瑞穂・高馬三良訳

『抱朴子』列仙伝・神仙伝・山海経(中国古典文学大系第八卷)(平凡社、一九六九年)

(26) 前野直彬「列仙伝解説」前野直彬訳『山海経』列仙伝(『全釈漢文大系第三三卷』(集英社、一九七五年)

(27) 『神女賦』

(前略)…眉聯娟以蛾揚兮、朱唇的其若丹。素質幹之夷兮、…(後略)

(28) 『釈名』積首飾

唇脂、以丹作之、象唇赤也。

(29) 『史記』卷二九・貨殖列伝第六九

而巴寡婦清、其先得丹穴、而擅其利数世、家亦不訾。清寡婦也、能守其業、用財自衛、不見侵犯。秦皇帝以為貞婦而客之、為築女懷清台。

(30) 『史記』卷二九・貨殖列伝第六九

(前略)…江南出柎・梓・薑・桂・金・錫・連・丹沙・犀・瑇瑁・珠璣・齒革…(後略)

(31) 『史記』卷二九・貨殖列伝第六九

巴蜀亦沃野、地饒厄・薑・丹沙・石・銅・鉄・竹・木之器。

(32) 『本草綱目』金石之三・石類上三十二種

時珍曰…(中略)…後人以丹為朱色之名、故呼朱砂。

(33) 『本草綱目』金石之三・石類上三十二種

經言末之名真朱者、謬矣、豈有一物以全末殊名乎。

(34) 鈴木真海訳『国訳本草綱目』第三冊(春陽堂書店、一九七九年)二九七頁注

(35) 今井弘「古代の中国文化を探る―道教と煉丹術―」(関西大学出版部、二〇一一年)一五七～一五八頁

(36) 『神農本草經』下経・玉石

味辛微寒。…(中略)…煉化還成九光。久服通神明。

(37) 『抱朴子』内篇・金丹

又藥子長丹法、以曾青鉛丹合汞及丹砂、著銅箒中、乾瓦白滑石封之、於白砂中蒸之、八十日、服如小豆、三年仙矣。

(38) 『隋書』卷三四・志第二九・經籍三子／医方

名医別錄三卷 陶氏撰

(39) 『名医別錄』中品・卷第三・鉛丹

止小便利、除毒熱臍攣、金瘡溢血、生蜀郡。一名鉛華、生於鉛。

(40) 『本草綱目』金石之一・鉛丹

時珍曰鉛丹本無甚毒、此婦產后冬月服之過劑、其病宜矣。

(41) 『本草綱目』金石之一・鉛丹

按独孤滔丹房鏡源云炒鉛丹法、用鉛一斤、土硫黃十兩、硝石一兩。熔鉛成汁、下醋点之、滾沸時下硫一塊、少頃下硝少許、沸定再点醋、依前下少許硝、黃、待為末、則成丹矣。

(42) 『名医別錄』上品・卷第一・丹砂

無毒。主通血脉、止煩滿、消渴、益精神、悅沢人面、除中惡、腹痛・毒氣・疥・諸瘡。久服輕身神仙。作末名真朱、光色如雲母、可析者良。

(43) 『雷公炮炙論』上卷・真珠

雷公云凡使、須取新淨者、以絹袋盛之。然后用地榆、五花皮、五方草三味各四兩、細銼了、又以牡蠣約重四、五斤已來、先置于平底鑊中、以物四向。令穩、然后着真珠于上、了方下銼了三件藥、籠之、以漿水煮三日夜、勿令火歇。日滿出之、用甘草湯淘之令淨後、于臼中搗令細以絹羅重重篩過、却更研二万下了用。凡使、要不傷破及

鉛透者、方可用也。

(44) 沈澍農「真朱与真珠的名称沿革与古今錯乱考」(『中華

医史雜誌』三〇一、二〇〇〇年)〔中国語文獻〕

(45) 孫啓明「真朱古代用藥考核」(『山東中医學院學報』一

二一二、一九八八年)〔中国語文獻〕

(46) 『外台秘要』卷第七／多唾停飲痛方二首

集驗療心痛唾多似虫者方、取六畜心、随得生切作四脔、刀縱橫各一割破之、納少真朱砂著中、平旦吞之、虫死愈矣。无真朱砂、可用雄黃、麝香也。

(47) 『宋書』卷一八・志第八・礼五

第三品以下、加不得服三金釧以上、蔽結、爵叉、假真珠翡翠校飾纓佩、雜采衣、杯文綺、齊繡黼、鎡離、桂袍。：(中略)：第八品以下、加不得服羅、紬、綺、縠、雜色真文。騎士卒百工人、加不得服大絳紫縠、仮結、真珠瑠珞、犀、瑇瑁、越疊、以銀飾器物：(後略)

(48) 『隋書』卷八二・列傳第四七・南蠻／真臘

王着朝霞古貝、瞞絡腰腹、下垂至脛、頭戴金宝花冠、被真珠瓔珞、足履革屣、耳懸金瑱。

『旧唐書』卷四五・志第二五・輿服／天子衣服

白袴、玉具裝、真珠宝鈿帶、乘馬則服之。

『隋書』『旧唐書』『新唐書』には、その他にも真珠が散見される。

(49) 『元史』卷一三・本紀第一三・世祖忽必烈一〇／至元

二一年

江浙行省平章忙忽帶進真珠百斤。

真珠の語は『元史』では上記以外に二箇所の記事に現れ

る。

- (50) 大庭脩「第六章 卑弥呼を親魏倭王とする制書」『古代中世における日中関係史の研究』(前掲注13)

- (51) 『列仙伝』主柱

主柱者、不知何所人也。與道士共上宕山、言此有丹砂、可得数万斤。

- (52) 『列仙伝』朱仲

景帝時復来献三寸珠数十枚、輒去不知所之云。

- (53) 『抱朴子』内篇・仙藥

又真珠径一寸以上可服、服之可以長久、酪漿漬之皆化如水銀、亦可以浮石水蜂窠化、包彤蛇黃合之、可引長三四尺、丸服之、絶穀服之、則不死而長生也。

- (54) 仙藥・丹藥としての真珠にふれた論考として下記をあげておく。

今井弘「古代の中国文化を知る―道教と煉丹術―」(関西大学出版部、二〇一一年)一八五頁

朱越利「論葛洪的陽丹術」(『西南民族大学学報』〔人文社会科学版〕一九一、二〇〇七年)〔中国語文獻〕

- (55) 『列仙伝』朱仲

朱仲者、会稽人也、常於会稽市上販珠。漢高后時、下書募三寸珠。仲說購書笑曰直值汝矣。齋三寸珠詣闕上書。珠好過度、即賜五百金。魯元公主復私以七白金、從仲購珠。仲獻四寸珠、送置於闕即去。下書会稽徵聘、不知所。景帝時復来献三寸珠数十枚、輒去不知所之云。

- (56) 『塩鉄論』卷六・散不足

及秦始皇覽怪迂、信祿祥、使盧生求羨門高、徐市等入海

求不死之藥。當此之時、燕、齊之士、糶鋤耒、爭言神仙。方士於是趣咸陽者以千数、言仙人食金飲珠、然後寿與天地相保。於是数巡狩五嶽、滨海之館、以求神仙蓬萊之屬。数幸之郡、富人以貨佐、貧者築道旁。

- (57) 緯書に關しては下記文獻を参照した。

安居香山『緯書の成立とその展開』(国書刊行会、一九七九年)

浅野裕一「儒教の形成(V)・・緯書による孔子の神秘化」

(『國際文化研究科論集』三、一九九五年)

趙立男「緯書の成立および日本への流伝―『易緯』と孟京易学を中心に―」(『アジア文化研究』一五、二〇〇八年)

孝經關係緯書に關しては下記文獻参照。

加地伸之「『孝經』關係緯書をめぐる若干の問題」(『斯文』一〇五、一九九六年)

- (58) 『孝經援神契』

仙藥之上者丹砂、次則黄金、次則白銀、次則諸芝、次則五玉、次則雲母、次則明珠、次則雄黃、次則太乙禹餘糧、次則石中黄子、次則石桂、次則石英、次則石腦、次則石硫黃、次則石台、次則曾青、次則松柏脂、茯苓、地黄、麥門冬、木巨勝、重樓、黄連、石葦、楮實、象柴、一名托盧是也。

上記の引用は安居香山・中村璋八『重修緯書集成』卷五(明德出版社、一九七三年)五七頁によった。

- (59) 『呂氏春秋』季春紀・尽数

精氣之集也、必有入也。集於羽鳥與為飛揚、集於走獸與

為流行、集於珠玉與為精明、集於樹木與為茂長、集於聖人與為寬明。精氣之來也、因輕而揚之、因走而行之、因美而良之、因長而養之、因智而明之。

(60) 刊本は下記を参照した。

李時珍著・張紹棠重訂『本草綱目』国学基本叢書四百種
(台湾商務印書館、一九六八年)〔中国語文獻〕
李時珍『本草綱目』校点本(人民卫生出版社、一九七五年)〔中国語文獻〕

(61) 天然真珠の大きさや形態については、真珠博物館(三重県鳥羽市)で実見した。あわせて、天然真珠の利用やその歴史については下記文獻を参照した。

松月清郎『真珠の文化史』(研成社、二〇〇二年)

(62) 本論の対象と時代と地域は異なる場合も含めて、真珠を粉末にして服用した事例は下記文獻とその引用文獻が参考になる。

杉山二郎・山崎幹夫・坂口昌明『真珠の文化史』(学生社、一九九〇年)

松月清郎『真珠の文化史』(前掲注59)

山田篤美『真珠の世界史―富と野望の五千年』(中央公論新社、二〇一三年)

また、江戸時代における真珠の服用と薬としての認識は下記を参照。

寺島良安編『和漢三才図会』上、下(東京美術、一九七〇年)

小野蘭山著・正宗敦夫編纂校訂『重訂本草綱目啓蒙』(日本古典全集刊行会、一九二八―一九二九年)

小野蘭山著・杉本つとむ編著『本草綱目啓蒙』本文・研究・索引(早稲田大学出版部、一九七四年)

(63) なお、以下にあげた考古資料の出典では丹砂等に関して、報告書に図が掲載されておらず、あるいはきわめて不鮮明であったり、詳細な情報が図示されていない事例があり、それらは図示しなかった。

(64) 王守道「馬王堆一号漢墓印花敷彩紗「N15」顔料的射線物相分析」『化学通報』一九七五年第四期(中国語文獻)なお、新石器時代の辰砂については下記参照。
周国信「中国的辰砂及其發展史」『敦煌研究』二〇一〇年第二期(中国語文獻)

(65) 齊家文化期の年代については下記を参照し、そのうち最新のデータを示した。

任瑞波・陳葦「閔齊家文化的幾個基本問題」(『四川文物』二〇一七年第五期)〔中国語文獻〕

飯島武次『中国考古学のてびき』(同成社、二〇一五年)二九頁

易華「從齊家到二里頭・夏文化探索」(『學術月刊』二〇一四年第二二期)〔中国語文獻〕

(66) 青海省文物管理所考古隊・北京大学歴史系考古專業「青海楽都柳湾原始社会墓葬第一次発掘の初步收穫」(『文物』一九七六年第一期)〔中国語文獻〕

各埋葬遺構の時期に関しては下記を参照した。青海省文物管理所考古隊・中国科学院考古研究所編『青海柳湾・楽都柳湾原始社会墓地』上(文物出版社、一九八四年)〔中国語文獻〕

- (67) 中国科学院考古研究所「二里頭工作隊」河南偃師二里頭遺址三・八区発掘簡報」(『考古』一九七五年第五期) (中国語文献)
 なお、二里頭文化の年代については下記文献を参照した。
- 張東「編年与闡釈——二里頭文化年代学研究的時間観」(『文物』二〇一三年第六期) (中国語文献)
- 魏凱「二里頭文化年代学研究的反思——多元証据的分歧与互校」(『中国国家博物館館刊』二〇一五年第五期) (中国語文献)
- 飯島武次『中国考古学のてびき』(前掲注58) 三九頁
- (68) 中国社会科学院考古研究所編『殷墟婦好墓』(文物出版社、一九八〇年) (中国語文献)
- (69) 胡秉華「滕州前掌大商代墓葬」(『考古学報』一九九二年第三期) (中国語文献)
- 張応橋「關於山東滕州前掌大M3、M4的年代問題」(『中原文物』二〇〇六年第二期) (中国語文献)
- 中国社会科学院考古研究所編著『滕州前掌大墓地』(文物出版社、二〇〇五年)
- (70) 崔大庸・任相宏「山東長清県仙人台周代墓地」(『考古』一九九八年第九期) (中国語文献)
- 方輝・崔大庸「長清仙人台五号墓発掘簡報」(『文物』一九九八年第九期) (中国語文献)
- 朱継平「周代鄆国地望及相关問題再探」(『杭州師範大学学报』(社会科学版) 二〇一三年第三期) (中国語文献)
- (71) 南京博物館ほか「海州西漢霍賀墓清理簡報」(『考古』一九七四年第三期) (中国語文献)
- (72) 湖南医学院主編『長沙馬王堆一号漢墓古尸研究』(文物出版社、一九八〇年) (中国語文献) 二二四頁 なお、図版は掲載されていない。
- (73) 大形徹「道教における神仙思想の位置づけ——尸解仙の事例を手がかりとして——」『国際日本文化研究センター編』『道教と東アジア文化』国際シンポジウム集(国際日本文化研究センター、二〇〇〇年)
- (74) 王堆漢墓帛書整理小組編『五十二病方』(文物出版社、一九七九年) (中国語文献)
- 劉麗仙「長沙馬王堆三号漢墓出土藥物」(『中国医学報』二二二、一九八七年) (中国語文献)
- 小曾戸洋・長谷部英一・町泉寿郎著・馬王堆出土文献訳注叢書編集委員会編『五十二病方』(東方書店、二〇〇七年) などを参照。なお、本文中の釈文もこれらの文献によった。
- (75) 『五十二病方』
 一、白處。白處者、白母奏。取丹沙与鱸魚血、若以鷄血、皆可。
- (76) 『五十二病方』
 一、般者、以水銀二、男子惡四、丹一、并和、置突二、三日、盛、即□□□囊而敷之。
- (77) 『五十二病方』
 一、瘍。瘍者有牝牡、牡高肤、牝有空。治以丹□□□□□□□□□□為一合、搗之、以猪織膏和、傳之。
- (78) 劉麗仙「長沙馬王堆三号漢墓出土藥物鑑定研究」(『考

古』一九八九年第九期) (中国語文献)

劉麗仙「長沙馬王堆三号漢墓出土藥物鑑定報告」湖南省博物館・湖南省文物考古研究所編『長沙馬王堆二、三号漢墓』(文物出版社、二〇〇四年) (中国語文献)

(79) 馬王堆漢墓帛書整理小組編『五十二病方』(文物出版社、一九七九年) (中国語文献)

劉麗仙「長沙馬王堆三号漢墓出土藥物」(『中国医学報』二二二、一九八七年) (中国語文献)

小曾戸洋・長谷部英一・町泉寿郎著・馬王堆出土文献訳注叢書編集委員会編『五十二病方』(前掲注74)などを参照。なお、上記の釈文もこれらの文献によった。

(80) 咸陽市文物考古研究所「咸陽教育学院東漢墓清理簡報」、劉衛鵬「漢永平三年朱陶瓶考釈」咸陽市文物考古研究所編『文物考古論集—咸陽市文物考古研究所成立十周年紀念』(三秦出版社、二〇〇〇年) (中国語文献)

(81) 劉衛鵬「漢代鎮墓瓶所見『神藥』考」(『宗教教学研究』二〇〇九年第三期) (中国語文献)

(82) 劉衛鵬「五石」鎮墓說」(『文博』二〇〇一年第三期) (中国語文献)

(83) 『抱朴子』内篇・金丹

五石者、丹砂、雄黄、白礬、曾青、慈石也。一石輒五轉而各成五色、五石而二十五色。

(84) 『抱朴子』金丹

又墨子丹法、用汞及五石液於銅器中、火熬之、以鉄匕撓之、十日、還為丹、服之一刀圭、万病去身、長服不死。

(85) 『周礼』天官冢宰

凡療瘍、以五毒攻之、以五氣養之、以五藥療之、以五味節之。

(86) 『周礼』天官冢宰の鄭玄注

今医方有五毒之藥。作之、合黄礬、置石膽、丹沙、雄黄、礬石、慈石其中、燒之三日三夜、其煙上著、以雞羽埽取之。以注創、惡肉破、骨則尽出。

(87) 『史記』卷一〇五・扁鵲倉公列伝第四五／太倉公淳于意

齊王侍医遂病、自練五石服之。

(88) 『史記』卷一〇五・扁鵲倉公列伝第四五／太倉公淳于意

臣意即診之、告曰公病中熱。論曰中熱不洩者、不可服五石。

(89) 護善煥「曹植墓碑銘釈読淺議」(『文物』一九九六年—第一〇期) (中国文)

劉玉新「山東省東阿県曹植墓の発掘」(『華夏考古』一九九九年—第一期) (中国文)

(90) 南京市文物保管委員会「南京象山東晋王丹虎墓和二、四号墓発掘簡報」(『文物』一九六五年第一〇期) (中国語文献)

(91) 『晋書』卷四七・列伝第一七／傳玄子咸 咸従父弟祗帝下詔曰：(中略)：近者孔叢、綦母衡皆案以輕慢之罪

：(後略)

(92) 無記名「南京板橋東晋墓出土千年『仙丹』」『南京日報』二〇一四年一月二七日付(中国語文献)

無記名「江蘇南京東晋墓出土十余枚千年前不老仙丹」

- (93) 『芸術品鑑』二〇一四年第三期〔中国語文献〕
四川省文物考古研究所・綿陽市博物館編『綿陽永興双包山二号西漢木槨墓發掘簡報』(『文物』一九九六年第一〇期)〔中国語文献〕
四川省文物考古研究院・綿陽博物館編『綿陽双包山漢墓』(文物出版社、二〇〇六年)〔中国語文献〕
- (94) 梁宏剛・孫淑雲・何志国『四川綿陽双包山漢墓出土金汞合金的実物的研究』四川省文物考古研究院・綿陽博物館編『綿陽双包山漢墓』(前掲注82)
梁宏剛・孫淑雲・何志国『四川綿陽双包山漢墓出土金汞合金的実物的研究』(『文物』二〇〇六年第四期)〔中国語文献〕
- 何志国・孫淑雲・梁宏剛『我国最早的道教煉丹実物―綿陽双包山漢墓出土金汞合金の初步研究』(『自然科学史研究』二六―一、二〇〇七年)〔中国語文献〕
- (95) 陝西省博物館・文管会革委会寫作小組『西安南郊何家村發現唐代窖藏文物』(『文物』一九七二年第一期)〔中国語文献〕
- (96) 吳德鐸『何家村出土医藥文物補正』(『考古』一九八二年第五期)〔中国語文献〕
- (97) 陝西始皇陵秦俑坑考古發掘隊・秦始皇兵馬俑博物館『秦始皇陵兵馬俑』(文物出版社、一九八三年)〔中国語文献〕
- 李亜東『秦俑彩繪顔料及秦代顔料史考』(『考古与文物』一九八三年第三期)〔中国語文献〕
- (98) 恵任劉成・尹申平『陝西旬邑東漢壁画墓顔料研究』(『考古与文物』二〇〇七年第三期)〔中国語文献〕
- (99) 神仙思想の流行と道教の初期的な展開とを論じた論著は数多いが、これを專題としない本論では、ひとまず関連する研究やその流れを簡潔に整理した近年の論考をあげておきたい。
陳仲奇『道教神仙説の成立について』(『総合政策論叢』〔島根県立大学総合政策学部中国思想〕一、二〇〇一年)
大形徹『神仙思想研究小史―神仙思想はどのように研究されてきたか(1)(2)』(『中国研究集刊』二七、二八、二〇〇〇、二〇〇一年)
また、「僊」「仙」の文字の変遷から、神仙思想における「僊居」「仙人」などの意味の変容を論じた下記論考があり、後漢代の神仙思想の流布を示す実物資料として銅鏡銘文では後漢代に「仙人」「仙」の字句が定型化していくことが説かれている。
大形徹「僊」と「仙」―神仙思想の形成と文字の変化―(『人間文化学研究集録』〔大阪府立大学大学院〕一二、二〇〇二年)
- (100) 市毛勲『朱の考古学 新版』(前掲注6)
成瀬正和『縄文時代の赤色顔料Ⅰ―赤彩土器―、奥義次『縄文時代の赤色顔料3伊勢における朱の開発をめぐる』(『月刊考古学ジャーナル』四三八、一九九八年)
なお、近年の統計的検討に資する試料数(約三五〇点)の科学的分析からも縄文時代における辰砂利用が跡づけられている。

永嶋正春「下宅部遺跡出土縄文時代赤色顔料関係資料の蛍光線分析結果」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一八七、二〇一四年)

(101) 徳島県立博物館編『辰砂生産遺跡の調査…徳島県阿南市若杉山遺跡』(前掲注7)

岡山真知子「水銀朱精製用具の検討―弥生時代中期末、後期初頭」(『古代文化』五五―六、二〇〇三年)

(102) 『漢書』卷六・武帝劉徹紀第六／元鼎六年

「遂定越地、以為南海、蒼梧、鬱林、合浦、交趾、九真、日南、珠厓、儋耳郡」の注として「応劭曰二郡在大海中崖岸之邊。出真珠、故曰珠厓…(後略)」とある。

(103) 張一純「談海南島歴史的二三事」(『史学月刊』一九六四年第一〇期)〔中国語文献〕

楊徳春「從西漢至唐代中央封建政權對海南島統治的探討」(『海南大学学报』(社会科学版)一九八四年第四期)〔中国語文献〕などを参照。

(104) 三重県埋蔵文化財センター編『天白遺跡』(三重県埋蔵文化財センター、一九九五年)

度会町教育委員会編『森添遺跡』(度会町教育委員会、二〇一一年)

(105) 徳島県博物館編『辰砂生産遺跡の調査…徳島県阿南市若杉山遺跡』(前掲注7)

(106) 北條芳隆「神仙思想と朱と倭人―弥生時代から古墳時代へ―」(『月刊考古学ジャーナル』四三八、一九九八年)